

アメリカ英語における独立 *although* 節の史的発達について¹

水野 優子

1. はじめに

英語の *although* 節には、従属節としての用法の他に、主節を伴わない独立節としての用法があることが指摘されている (Mizuno 2022)。従属節が主節のように振る舞う現象は *insubordination* (脱従属化) と呼ばれており、独立 *because* 節についてはその歴史的発達に関する研究が多数行われてきた。一方、独立 *although* 節が歴史的にどのように発達してきたかについては、まだ十分に検証されていない。本研究は、話し言葉で用いられる *although* 節を通時的に観察し、独立用法の談話機能がどのように発達してきたかを記述することを目的とする。

2. データ

使用コーパスは、*The Corpus of Historical American English* (COHA) に収録されている FICTION のジャンルを利用し、1820 年代から 2010 年代の小説の会話部分からデータを集めた。COHA の FICTION には合計で 30,082 件の *although* が生起していたが、会話部分から用例を収集するため、今回は引用符(“)の直後に現れる *although* に対象を限定した。まず、検索式 “*although*” を使用し、1,058 件の用例を抽出した。この内、会話部分以外の *although* を手作業で除外し、その結果得られた 501 例の *although* を分析対象とした。

3. 分析と考察

まず、収集した *although* の用例の統語的振舞いを観察すると、(i) 主節に対して前置された従属節を導く場合、(ii) 主節に対して後置された従属節を導き、主節と *although* 節の間に *she said* のような伝達部が挿入されている場合、(iii) 独立節を導く場合の 3 パターンに分類することができた。さらに(iii)は、(a) *although* 節が話し手自身の発話を受ける場合と、(b) 聞き手の発話を受ける場合に二分することができた。(i)、(ii)、(iii)の用例を、それぞれ(1)、(2)、(3)に示す。

(1) " **Although** I've worked hard I've not made the hotel pay.

(2) " I would guess that I look very nice this way, " she said, " **although** I don't have a large mirror, so I'm not sure.

(3) a. " Actually, the collective noun for swans is a wedge of swans, " Dad said. " **Although** that's used when they are flying in a V formation.

b. " Evelyn, your food will get cold. It cools off quickly here, doesn't it? " Louise addressed the table, and they agreed. " **Although**, " Martha said, " it doesn't much matter if you can't taste it anyway. "

表 1 COHAにおける*although*の用法の変遷

年代	(i) 前置 従属節	(ii) 後置 従属節	(iii) 独立節			その他	合計
			話し手自身の 発話を受ける	聞き手の 発話を受ける	不明		
1820s	3	3					6
1830s	15	8					23
1840s	6	11	1	1			19
1850s	18	3	1	1		1	24
1860s	10	2				1	13
1870s	11	7	2	2			22
1880s	5	10	2			1	18
1890s	9	10					19
1900s	8	18	4	1		1	32
1910s	9	20	5				34
1920s	4	4	10		1	2	21
1930s	5	12	1	1			19
1940s	4	8	8			1	21
1950s	5	8	11	1			25
1960s	1	6	8	1			16
1970s	4	9	20	1			34
1980s	5	11	9	3			28
1990s	5	8	21	1		2	37
2000s	5	3	23	5		2	38
2010s	12	6	30	4			52
合計	144	167	156	22	1	11	501

表2 独立*although*節の各用法の初出時期

年代	話し手自身の発話を受ける場合				聞き手の発話を受ける場合		
	訂正譲歩	自己修正	話題転換	標準譲歩	訂正譲歩	不賛成	標準譲歩
1840s	○				○		
1850s							
1860s							
1870s						○	
1880s		○					
1890s							
1900s			○				
1910s							
1920s				○			
1930s							○

収集したデータを 10 年毎に分類し、各年代における各統語パターンを調査した結果、表 1 の結果が得られた。数値は素頻度を表している。表 1 から、独立用法の内、話し手自身の発話を受ける用法は、1840 年代から確認され、1900 年代から現代に至るまで、徐々に頻度が増加していることがわかった。一方、聞き手の発話を受ける用法も 1840 年代から確認され 1980 年代から増加傾向にあるものの、その頻度は現代に至るまで、話し手自身の発話を受ける用法よりも低いことがわかった。

次に、独立 *although* 節の5つの機能、すなわち標準譲歩、訂正譲歩、自己訂正、不賛成 (Mizuno 2022)、話題転換 (水野 2023) が、いつ頃から使用され始めたかを調査し、表2の結果が得られた。表2から、各用法の初出時期には差があり、話し手自身の発話を受ける用法、聞き手の発話を受ける用法共に、初期の例では訂正譲歩を表していたことがわかった。訂正譲歩と話題展開の初出の用例を、それぞれ(4)と(5)に示す。

(4) [状況説明] 中年の紳士が孤児院を訪れ、孤児である Puffer に小切手を残して去って行った。このことを、大人になった Puffer が Hobbleshank に語った後の場面。

"What does this mean?" asked Hobbleshank, anxiously. "He was no relation of yours." "I don't believe he was," answered Puffer, laughing. "Although I learned on inquiry in the neighborhood, years after, when I had drawn the money he had left me, that he had been a bachelor who had married late in life, and been much mocked and joked at for having no children. He had given out that they might be mistaken, and, by frequent visits to the asylum and this goodness toward me, succeeded in getting his gossips and aspersers off the scent. He was dead, and his wife too, when I inquired, and that was all I ever knew of him."

(1843 *Various Writings*: FIC, COHA)

(5) [状況説明] Sam と Dick と Tom が、先ほどまで一緒にいた女の子たちについて話題にしている場面。
"There is no use of talking, those girls are just all right," said Sam, bluntly. "I never met a nicer lot in my life." "I guess Dick thinks one of them is all right," said Tom, with a grin. "Although I don't see why you were steering her into the smoking room," he added, to his big brother. "Were you going to teach her to smoke cigarettes?"

(1905 *Rover Boys On River*: FIC, COHA)

(4)では、Puffer の発言が *I don't believe he was* で終わると、「紳士がなぜ自分に小切手を残したか自分は知らない」ということが含意されるが、*Although* 以下の発話はこの含意を打ち消すことで、先行発話を緩和している。

(5)では、女の子たちの素晴らしさから、その中の一人を Dick が喫煙室へ連れて行った理由へと話題の転換が起きており、*Although* は話題転換を合図する談話標識的な役割を果たしている。

さらに今回の調査で、訂正譲歩を表す独立 *although* 節が会話の中で用いられると、(6)に例示されるように、「話し手が、自分自身の先行発話が聞き手から批判や反論される可能性があることを予測し、相手が発言する前に自分の先行発話の主張を緩和する」機能を持つことがわかった。

(6) [状況説明] 少女の遺体を前にして、Hugo と Agard が少女の死因について話をしている場面。

"You mean she was beaten?" "I do." "Which indicates murder." "Right," Hugo said. "Although her face isn't marked and she has no defensive wounds on her hands or forearms. But there's something else, have a look."

(6)では、Hugo は「彼女の死は殺人によるものだった」という自分の先行発話が聞き手から反論を受けるかもしれないと感じ、*Although* 以下で先行発話と対立する内容を述べている。

最後に、以上の分析結果を「間主観性」と「譲歩からの意味拡張」という観点から考察する。Traugott (2003)によると、「間主観化とは、意味の焦点がより聞き手に置かれるようになるメカニズムである」(日本語訳は澤田・小野寺・東泉 (2017:17)による)。(6)に例示した、独立 *although* 節の「聞き手からの反論を想定し、先手を打って自分の発言内容を緩和する」用法は、聞き手の心的態度に話し手が注目しているという点で間主観性を持つと言える。また大橋 (2021)は、間主観性を持つ譲歩を表す表現には、話題転換を示す談話標識的な機能を発達させるという意味拡張の方向性が見られることを示唆している。独立 *although* 節が話題転換の用法を発達させていることは、この譲歩からの意味拡張に一定の方向が見られるという考えを支持するものである。

4. おわりに

本発表は、独立 *although* 節の事例は 1840 年代から確認され、1900 年代ころからよく使われるようになったこと、用法によって初出の時期に差があり、初期の例では訂正譲歩を表していたことを実証的に示した。

参考文献

- Mizuno, Yuko. 2022. "A Corpus-Based Analysis of Independent *Although* and *Though* Clauses: Their Commonalities and Differences." *JELS* 39, pp. 143-149.
- 水野優子. 2023. 「譲歩からの変化—話し言葉における発話頭 *although* の分析」. 『日本英文学会北海道支部第 67 回大会 (2022 年度) Proceedings』.
- 大橋浩. 2021. 「譲歩構文からの拡張」. 天野・早瀬 (編)『構文と主観性』. 東京: くろしお出版, pp. 97-118.
- 澤田淳・小野寺典子・東泉裕子. 2017. 「周辺部研究の基礎知識」. 小野寺 (編)『発話のはじめと終わり—語用論的調節のなされる場所』. 東京: ひつじ書房, pp. 3-51.
- Traugott, Elizabeth Closs. 2003. "From Subjectification to Intersubjectification." Hickey, Raymond (ed.) *Motives for Language Change*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 124-139.

¹ 本研究は JSPS 科研費 JP22K00614 の助成を受けたものです。